

潰瘍をきたす疾患

編集担当 馬場 直子

動画 Editor's eye
を始めました。

下記よりアクセスください。

<https://vimeo.com/466023011>



さまざまな皮疹の形態の中で、潰瘍ほど皮膚科医にとって嫌なもの、一刻も早く治したいものはない。なぜならば、潰瘍は表皮だけでなく真皮や皮下組織、ときには筋膜や骨にまで及ぶ障害や欠損であり、一度潰瘍にまでなってしまうと必ず瘢痕を残し、決して跡形なく治るというわけにはいかないからである。また、潰瘍があると出血や感染を伴いやすく、ときには敗血症をきたし生命まで脅かされることさえある。本号では皮膚潰瘍をきたす疾患にスポットを当て、さまざまな原因により潰瘍となった症例報告を集め、また皮膚潰瘍の最新の治療法として、癌性潰瘍のマネジメント、陰圧閉鎖療法の皮膚欠損部の植皮術への応用、また褥瘡の局所療法について、それぞれのエキスパートに解説していただいた。

Topics「癌性潰瘍に対するマネジメント」では、癌患者の皮膚の潰瘍病変には特有の臭気、出血、疼痛があり、また整容面でも患者の行動範囲を著しく制限し、QOLが大きく損なわれるため、そのマネジメントの重要性と、Mohs軟膏とメトロニダゾール軟膏による具体的な処置法を詳細に解説いただき、明日からの臨床に役立つと思われた。また、植皮術における陰圧閉鎖療法は、従来のタイオーバー法にはなかった創の縮小効果や肉芽形成の促進、過剰な浸出液の除去など多くの利点があり、短期間で優れた生着率が得られ、患者のQOLを大きく向上させ得る新しい治療法であることに感銘を受けた。また、褥瘡はもっとも身近で日々関わらざるを得ないcommon diseaseであるが、原因や部位、症状は多岐にわたり、治癒には複雑でさまざまな要因をはらんでいるが「ガイドラインからみた褥瘡の局所療法」にはその基本的な考え方と評価法、正確な評価に基づいた適切な対処法がとてもわかりやすくコンパクトに整理してあり、混沌としていた褥瘡治療の考え方がすっきりした気持ちになった。潰瘍をきたした症例の報告として基底細胞癌、脂腺癌、Langerhans細胞組織球症などの腫瘍性、Buruli潰瘍、悪性梅毒、非結核性抗酸菌症などの感染性、壊疽性膿皮症、リポイド類壊死症、悪性関節リウマチなどを集めてみたが、1つ1つの症例について「自分が主治医だったなら」と思いながら読むことで、今後の臨床力アップにつながると思った。1つ変わり種として、ミュンヒハウゼン症候群があるが、こども病院の児童精神科の患児でもときどき経験するので大変興味深く読んだ。この「潰瘍をきたす」特集号1冊を熟読していただければ、明日からの潰瘍をみる目が少し変わってくるのではないかと期待したい。